

頭頸部癌患者の就労や生命に関する予後予測に関する研究

愛知県がんセンター中央病院

頭頸部外科 医長 鈴木秀典

愛知県がんセンター中央病院

看護部 看護師 岩井美世子

愛知県がんセンター中央病院

地域医療連携・相談支援センター室長補佐 船崎初美

1. 研究の背景・目的

頭頸部癌患者に関する臨床研究は、主にこれまで診断や治療成績、いわゆる生存率が重視されてきた。また、抗がん剤の開発や放射線治療の発展により声帯温存や顔貌などの容姿温存などの臓器温存や機能温存治療が開発されてきた。さらに TNM 分類をはじめとする予後因子から PET/CT などの画像情報からの生命予後等の予後予測に関する研究が行われてきた。

我々も頭頸部癌患者に関する生命予後や再発形式についての予後予測に関する研究（文献1－4）や頭頸部癌患者の術後感染という癌治療時の質に関する研究について国際英文誌に報告してきた。（文献5）

現在まで頭頸部癌患者の生命予後や機能温存予後向上に関する臨床研究開発は、発展し向上してきた。しかしながら治療後の生活の質、さらに就労といった臨床研究はほとんどされておらず、本研究の課題名である「頭頸部癌患者の就労や生命に関する予後予測に関する研究」の独創性と必要性を着想した。また、がん対策推進基本計画において的重点的に取り組む課題の「働く世代へのがん対策の充実」の基礎となる情報となり今後のがん診療と対策において影響を与えうる研究になりえることに研究の目的と意義があると考えた。

さらに本研究は、医師、看護師、ソーシャルワーカーらの多職種による共同研究であり、医学、看護学、さらに社会福祉学への今後の基礎となる情報がえられ、発展の期待できる研究と考えた。

2. 研究の対象ならびに方法

本研究は、「画像情報や社会背景による頭頸部癌患者の就労や生命に関する予後予測の研究」の課題名にて平成 28 年 7 月 22 日に愛知県がんセンター中央病院倫理委員会に承認された。また愛知県がんセンター中央病院ホームページにてオプトアウトが実施されている。機能予後や生命予後は既に公開している手法で評価し、就労については、保険加入状況等を検討する。評価項目は、1) 基本的身体情報、2) 社会背景、3) 活動度、4) 癌の部位や病期、5) 治療法、6) 生命や機能、さらに就労などの転帰を主要な評価項目とし、情報を収集した。

3. 研究結果

第 32 回日本がん看護学会学術集会にて「頭頸部がん化学放射線療法が就労に及ぼす影響」の演題名にて口演発表した。2010 年 6 月～11 月までに当院で化学放射線治療を受けて、以下 4 項目を満たす頭頸部癌患者 13 名を対象とした。1) 治療開始時に職に就いている。2) 頭頸部がん手術療法による機能障害が無い。3) 日本語によるコミュニケーションが可能。4) 治療開始時、高度不安や精神疾患歴が無い。調査方法として放射治療開始時、治療開始後 1 か月半から 2 か月時（放射線治療 40Gy-50Gy 相当）、退院後 2-4 週間後の 3 回に調査した。調査内容は、無記名自記式質問紙にてパフォーマンス・ステータス、就労状況、経済状況を、診療録より病名、年齢、治療後 2 年以内の保険情報の変化を集計した。対象者の属性は男性 11・女性 2、40 代 1・50 代 3・60 代 6・70 代 3、勤務者 5・自営業者 8 であった。主な結果としてパフォーマンス・ステータスは治療開始前よりも治療中で悪化し治療後に回復する推移をたどった。勤務者 5 名中治療後に退職したのが 2 名であった。自営業者 8 名中退職者 0 名であったが休職 3 名であった。

4. 考察

放射線治療開始後 1 か月半から 2 か月時（放射線治療 40-50Gy 相当）では、パフォーマンスステータスの低下がみられることから、身体的要因の為に就労困難になっていることが予想された。勤務者では、治療と仕事の両立は困難であり、特に治療期間が長く先の予測が立てにくいことが休職や退職を選択する要因となっていることが推察された。一方、自営業者は経済的保障が低いことが就労せざるを得ない状況であることが考えられ、自営業者に対する両立支援も今後の重要な課題であると推察した。まだ研究期間も短いために症例数が少なく統計的にはっきりとした結果を出すことは困難であったが、第 32 回日本がん看護学会学術集会にても口演発表することができ「頭頸部癌患者の就労や生命に関する予後予測に関する研究」の独創性と必要性を

あらためて実感した。また、がん対策推進基本計画において「働く世代へのがん対策の充実」の基礎となる情報となり今後のがん診療と対策において影響を与えうる研究として重点的に取り組む課題であると考え、アンケートによる調査を今後予定している。

5. 文献

1. Impact of total lesion glycolysis measured by 18F-FDG-PET/CT on overall survival and distant metastasis in hypopharyngeal cancer. *Oncol Lett.* 2016, 12: 1493-1500. Suzuki H, Nishio M, Nakanishi H, et al.
2. Lymph node ratio predicts survival in hypopharyngeal cancer with positive lymph node metastasis. *Eur Arch Otorhinolaryngol.* 2016, 273: 4595-4600. Suzuki H, Matoba T, Hanai N, et al.
3. The Charlson comorbidity index is a prognostic factor in sinonasal tract squamous cell carcinoma. *Jpn J Clin Oncol.* 2016, 467: 646-651. Suzuki H, Hanai N, Nishikaawa D, et al.
4. Lymph node density predicts lung metastasis in oral squamous cell carcinoma. *Br J Oral Maxillofac Surg.* 2016, 46: 78-85. Suzuki H, Beppu S, Hanai N, et al.
5. Complication and surgical site infection for salvage surgery in head and neck cancer after chemoradiotherapy and bioradiotherapy. *Auris Nasus Larynx,* 2017, 44(5): 596-601.